

故学長 安津先生を悼む

学長代行 清水茂夫

故信州豊南女子短期大学学長安津素彦先生は昭和六十年十一月二十八日午後一時に溘焉と七十二歳で御長逝された。豊南学園の本部事務局からの急報でただならず驚愕した。十一月朔日に、病室をお訪ねした時は、先生はラジオの政治討論を聞いておられ、病中においても政治に豊かな関心を寄せている御様子や力ある御声と血色のよいお顔に、安堵を覚えた。三日の落成式に無理して御出席しないようにお勧めする目的であったが、既に御出席を断念しておられたので、先生のお尋ねに応じて進路や推薦入学希望者の状態などをお話し、明るい気持ちで暇乞いをした。それだけに一箇月も経ずに幽明の境を異にしようとは、今更のように無常迅速の思いを噛み締めずにはいられなかった。

先生は昭和十年三月國學院大學道義科を御卒業、同年四月に道義研究室助手、同十五年四月に國學院大學講師、同二十三年に教授となられ、同二十八年十二月には論文「神道研究序説」によって、國學院大學から文学博士の学位を授けられた。先生の御研究は神道宗教学・同思想史で、昭和五十八年三月定年によって退職されるまで、神道の研究に生涯を培けられた。著書二十余、論文は極めて多い。

先生の神道研究については残念ながら多くをお聞きする機会はなく、たゞ一度、日本の神道は世界の宗教の中で最も自然性を尊重していると言われた。今世界のあちこちで行われている戦争は多くは宗教戦争であるとされ、批判さ

れるのに神道の自然性を以てなされたのである。神道と関連あるものとして、学生に求められた礼儀作法の遵守も挙げる事ができよう。また研究者としての先生は、開学と共に、教官の研究を重視され、推進するため「紀要」の発行を指示され、既に第三号に及んでいる。

教育者としての先生の特色の顕著なのは、学生に説く訓辞の気魄に満ちた音声と、熱弁するお顔である。内容としては自主独立の精神・大学生の学習態度・地域社会に奉仕する心、やがて母となるべき者の生き方、等々、現代に生きる女子学生の理想を実践的に語られた。自主独立の精神は、豊南学園の歴史を貫く開学の精神である。大学生の学習態度は、新制大学の設置基準の一つであり、いまだに十分でない単位習得の実態を指摘されたもの。地域社会に奉仕する心は、地方の時代という思想を基礎とする、地域社会の教育理念であると言ってよい。短大に学ぶ女子学生に地域の奉仕活動に従うだけではなく、やがて地域住民として地域の発展に貢献する態度を形成させようと言われたのである。母となるべき者の生き方は、先生が短大の学長に就任する決意の表明でもあった。『安津元彦博士——人と業績——』という書物の中に、先生のある人への談話として「日本の復興はもう女性に期待する以外にはない。いい母を作ることだ。東京もだめだ。僕は信州へゆく。女子大に行くことにした。」と記されている。先生の女子大学生に期待することのいかに強固であるかを推察することができよう。それは当然によき母となるべき生き方を学習させ、真に日本の復興を背負う母を養成することに連なる。上述の自主独立・大学生の学習態度・地域社会に奉仕する心・母となるべき者の生き方は、相互に関連して、豊南女子短期大学における教育目標となっている。また、先生が豊南女子短期大学の紀要の第二号に掲げられた論考「近代個人意識の発生と終焉」は、恐らく先生の絶筆であつたと思われるが、先生が哲学的研鑽と思索の結果到達された真の人間とは何かが追求されている。その題目から察知できるように、近代個人意識の発生から出発して、その終焉において、あるべき人間像が追求されている。この論考は豊南女子短期

大学の教育目標の基盤的なものとして位置づけられる意図で書かれたものではなかったらうか。

こうして追懐の糸を繰り広げると、先生の堅実な思索・誠実と勤勉・決断と実行力・教職員に対する授業を重視せよとの要求など限りなく思い浮かんでくる。一つだけ例をあげよう。大学は山腹にあって麓から学舎に入るまでは見上げる程の石段である。先生はその石段を身軽げに上まで登りつめられる。私などその石段を見ると山上の寺院に至る。石段例えば身延山久遠寺の菩提梯などを想い起こしはするが、汗にまみれるのを恐れて、平坦な道路をゆっくりと登る。先生は学生にこの石段をのぼって身体を鍛えよと言われ、自らが学生の目前で実行する。実践を以て手本を示す七十二歳の御姿に圧倒された。

我が信州豊南女子短期大学も第三期工事が完成し、教育の基礎も成就した。しかし指導者安津学長を失ってしまった。今数年の指導が得られたならば、ゆるぎない大学となり得たことと思うと、まことに残念至極である。残された唯一つの道は、今の悲哀を胆に銘じて、先生の遺業を完遂するため全校挙って全力を傾注するより外はない。それが先生を生かす直路となるであらう。

年譜

明治四五年五月三一日

東京市下谷区西町二番地（現・台東区東上野）にて出生。

昭和一〇年（二三歳）

三月 國學院大學道義学科倫理科卒業

四月 國學院大學道義研究室助手を委嘱さる（一二年三月まで）

昭和一五年（二八歳）

四月 國學院大學講師拜命（興亜部開設に伴い、専門部興亜部講師として）

昭和二三年（三六歳）

四月 國學生大學教授を委嘱さる。

昭和二八年（四一歳）

一二月 國學院大學文学博士号（第二三号）取得。

昭和三三年（四六歳）

三月 大学院神道学専攻博士課程に伴い同教授（神道理論担当）。

昭和三七年（五〇歳）

六月 神社本庁講師を委嘱さる。

昭和四一年（五四歳）

一月 日本学術会議会員（第七期）に就任。

昭和四四年（五七歳）

一月 日本学術会議会員（第八期）に就任。

七月 日本学術会議宗教学研究連絡委員会委員を委嘱さる。

昭和五〇年（六三歳）

五月 日本文化研究所所員を委嘱さる。

昭和五三年（六六歳）

五月 國學院大學消費生活協同組合理事長を委嘱さる（昭和五七年四月まで）。

昭和五五年（六八歳）

二月 大宮幼稚園園長を委嘱さる。

一二月 神道宗教学会会長を委嘱さる。

信州豊南女子短期大学（昭和五八年開学予定）学長予定者として設立準備を開始。

昭和五六年（六九歳）

十一月 國學院大學勤続四〇年表彰を受ける。

昭和五七年（七〇歳）

五月 國學院大學消費生活共同組合最高顧問を委嘱さる。

昭和五八年（七一歳）

三月 國學院大學定年退職。

四月 國學院大學名誉教授の称号を受く。

学校法人豊南学園理事・信州豊南女子短期大学学長として就任。

昭和六〇年（七三歳）

十一月二十八日 逝去。

業績

著書（共著・編著を含む）

昭和一五年 「神道と祭祀」 白帝社

昭和一六年 「上代神社論攷序説」 刀江書院

昭和一七年 「国学論纂」（編著） 神田書房

昭和一八年 「近世日本思想史」（共著） 神田書房

「佐藤信淵集」 地平社

昭和二四年 「神道史概説」

昭和二六年 「神道思想史」 神社本庁

昭和二九年 「神宮と皇室」(共著) 中央書籍株式会社

「神道概論」上篇 宗教学会

昭和三三年 「AN OUTLINE OF SHINTO TEACHINGS」

「BASIC TERMS OF SHINTO」(共著) 神社本庁・國學院大學

昭和四〇年 「日本人の宗教心理」 桜楓社

昭和四一年 「国号私考」 新教育懇談会

「明治天皇」 常陽明治記念会

昭和四三年 「神道辞典」(共著) 堀書店

昭和四六年 「世界文化大百科事典」全一四卷(分担執筆) 世界文化社

「神道思想史」前編 神社新報社

昭和四七年 「国旗の歴史」 桜楓社

「神道思想論叢」 白帝社

昭和四九年 「異邦人の神道観」 白帝社

昭和五一年 「誰でも知りたい日本の古典名著・総解説」(分担執筆) 自由国民社

昭和五四年 「国史大辞典」 吉川弘文館

昭和五五年 「日の丸―千三百年史―」(共著) 神道文化会

昭和五七年 「天照大御神」(編集) 神道文化会

昭和五八年 「聚注古事記」 桜楓社

最近の論文・調査報告

昭和五〇年 「天照大御神アモリ考―神道教学の一つの問題―」 「神道宗教」 七五―七九

「天皇と国家と教育」 「昭和史の天皇・日本」 「日本を守る会」 日本教文社

「神道文学覚え書―遠藤周作の文学―」 「国學院雑誌」 七六一―一

「日本文化教育について」 「第一回日韓教育研究会報告書」

昭和五一年 「生祠とは何か」 「神道研究紀要」 創刊号

「出雲国神社考」 「式内社のしをり」 三

「天津罪・国津罪」 「出雲神話」 講座日本の神話五」 有精堂

「近世の思想と塙先生」 「温故叢誌」 三〇

昭和五二年 「ヨミの国私考」 「出雲学論攷」 神道学会

「遠藤周作文学私考」 「人文科学研究紀要」 四（川村学園短大）

「神道の一側面―天照大御神の天降りを通して―」 「神道宗教」 八四・八五（神道の根本問題（二））

「高天原私考」 「折口博士記念古代研究所紀要」 三

「時論・国家私考」 「神道学」 九四

「度会西河原行忠の神道論」 「國學院大學日本文化研究所紀要」 四〇

「外宮神道の起源」 「瑞垣」 一一三

「国民の宗教意識と政治」 「現代法の新展開」 新評論

昭和五三年 「天照大御神と止由気大神と」 「國學院大學日本文化研究所紀要」 四二

昭和五四年 「外宮神道の起源についての試論」 「國學院大學大学院紀要」 一〇〇

「祓（ハラヘ）の哲学（I）」 「生きる知恵」 特別号

昭和五五年 「祓ひの哲学序論」 「神道宗教」 一〇〇

「多神道の論理」 「國學院雜誌」 八一—一

「岳父会田範治について」 『会田範治先生追想録』

昭和五六年 「神道の多神性の意味」 「大美和」

「「カクリミ」か「ミミヲカクシマス」か！」 「古事記年報」 二二三

「現憲法遵守のための条件」 『日本国憲法の批判的研究』 民族科学研究所 泰流社

「天台神道覚書—耀天記を中心として—」 「國學院雜誌」 八二—一一

昭和五七年 「天照大御神放」 神道文化会

昭和五八年 「神道の起源について」 神道宗教第三〇号

「吉田神道教学の覚書」（未完） 本学紀要 創刊号

昭和五九年 「近代個意識の発生と終焉」 本学紀要 第二号

その他 論文・調査報告・書評など約四〇〇編